

(様式第1号)

☐ 会議録 ☐ 会議要旨

会議の名称	第3回芦屋市学校教育審議会		
日時	令和7年10月2日(木) 13時30分～15時45分		
場所	市役所北館4階 教育委員会室		
出席者	会長 河合 優年 副会長 成田 健一 委員 伊賀 友香子 田附 俊一(オンライン出席) 野村 浩子 近藤 千恵 巽 愛子 武田 淳 欠席委員 柏原 由紀 木下 新吾 事務局 萩原 裕子 教育部長 塩山 利枝 教育部参事(学校教育担当部長) 長岡 良徳 教育部教育統括室管理課長 尾上 昌希 教育部学校教育室学校教育課長 内藤 純子 教育部学校教育室主幹(幼稚園教育担当課長) 平野 雅之 教育部教育統括室主幹(幼保連携担当課長) 無量林良蔵 教育部教育統括室管理課長補佐 市原 輝幸 教育部教育統括室管理課主査(学事担当) 関係課 茶嶋 奈美 こども福祉部参事(こども家庭担当部長) 篠原 あや こども福祉部こども家庭室主幹(保育向上担当課長)		
会議の公開	☒ 公開	☐ 非公開	☐ 一部公開
傍聴者数	2人		

1 会議次第

- (1) 会長あいさつ
- (2) 議事
 - ① 前回までの振り返り
 - ② 諮問内容等の審議(就学前施設と小中学校との連携のあり方について)
- (3) その他連絡事項

2 提出資料

- (1) 次第
- (2) 説明資料
 - ① 不登校児童生徒の年度別変化
 - ② 幼児教育の質の向上及び幼児教育と小学校教育との円滑な接続の改善について
(文部科学省資料)

3 審議内容

○事務局(長岡) 定刻になりましたので、ただいまから第3回芦屋市学校教育審議会を開

催させていただきたいと思います。

10月に入りまして、ようやく涼しくなってきたところで、活動しやすい季節になってきたかなと思っているところでございます。

本日は、事務局職員、いろいろと工夫してくれまして、ハイブリットで開催をさせていただきたいと思います。田附委員はオンラインで御参加です、どうぞよろしくお願いいたします。

そうしましたら、河合会長から、一言御挨拶を頂戴したいと思います。

○河合会長 よろしく願いいたします。

今日は、ちょっと話をすることがありました。高島市長がタイム誌で、次世代の100人の期待される人に選ばれたということで、ちらっと見ていると、学校の授業、学校教育のことも何かえらい評価されるということは、きっと我々のこの審議会ですが、この委員会の議論も、教育改革の中でどういうふうに行っているのか、教育委員会と市長部局のところでどういうふうに行っているのかということで、また注目されるかもしれないなと思っています。いやいやこれとは、今日このことはお話ししないといけないなと思いました。

そういうことで、我々も緊張感を持って進めていきたいと思います。よろしく願いいたします。

○事務局（長岡） 資料ですけど、事前にメールでお送りさせていただいておりますが、念のため、本日机上也に配付してございます。あと追加の資料といたしまして、カラー刷りの幼児教育と小学校教育の特徴とはという資料を配付させていただいております。田附委員にはメールでお送りしておりますので、また御確認をいただければと思います。よろしく願いいたします。

続きまして、会議運営上の取り決め事項について、このたびは御説明させていただきます。

この審議会は、芦屋市附属機関等の設置等に関する指針及び芦屋市学校教育審議会規則に基づき開催するものでございます。会議は委員の過半数の出席がなければ開くことができません。会議は原則公開で行います。個人情報等の非公開情報が含まれる場合や、公開することにより公正または円滑な会議ができない場合については、会長が会議に諮って、出席者の3分の2以上の同意を得た場合は非公開とすることができます。また会議の内容は、発言者が特定できるように会議録を作成いたしまして、皆様の御確認と会長と副会長に御確認の後、市のホームページへ掲載する予定でございます。念のため、会議録作成のため録音させていただきます。

それでは、まず会議の成立につきまして御報告をさせていただきます。

本日、委員10名中オンライン出席の田附委員を含めまして、8名の御出席をいただいておりますので、会議は成立してございます。会長、よろしいでしょうか。

○河合会長 そういたしましたら、毎回のことでありますけど、会議の公開について、お諮

りしたいと思います。

この会議はいつも皆さんに知っていただきたい、状況、現状を知っていただきたいということで公開としています。今回も公開としてと思いますけど、よろしいでしょうか。田附先生、よろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○河合会長 そういたしましたら、公開で取り扱いをしたいと思います。

傍聴希望されている方、おられますでしょうか。

○事務局（長岡） 傍聴者の方、2名いらっしゃいます。傍聴者の方に御入室いただきたいと思います。

(傍聴者 入場)

○事務局（長岡） この後の議事は河合会長にお願いしたいと思います。会長どうぞ、よろしく願いいたします。

○河合会長 そうしましたら、審議に入りたいと思います。

この審議会は今回3回目ですけど、全部で6回、最初に御了解をいただいているかと思っています。実際に答申案といたしますか、こういうことができるかいいと思いますというのを上げないといけないですけど、その原案をつくっていかねばなりません。

それを逆算すると、6回しかないの5回のところで骨組みをつくって、6回のところで、成案をここで承認をいただくことになろうかと思っています。精査して、必要であれば、臨時に増やすこともあるかもしれないということで、理解をしております。

今まで2回してまいりましたが、前回までに確認をしてきたこと、ここで議論してきたことを少し振り返っておきたいと思います。

一つはこども中心、ここは揺らがないことだと思います。今まで、市の統計も含めて御説明いただきましたけど、こどもの数が今後増えていくことは期待できない。少し横ばいもしくは漸増はあり得るかもしれないけど、どうしてもここだけではなくて、日本全体としても、こどもの数は減っていくだろうということで、これについて、ここで了解をいただきました。

前回もここでお話をさせていただきましたが、今の幼稚園では園児数は少ない。経費のコストパフォーマンスといたしますか、1人当たりの経費についても、ここで御議論いただきました。園児は少ないけど、それなりに工夫をしていただいていることについても、御了解をいただいたかと思います。

大きな問題としては、今、こどもの人数が減ってきて、少ないなりに努力しているけど、やっぱり経費がかかっていることは、これは厳然とした事実でありますので、これについてもここでお認めいただいて。それぞれいろんな意見で、そんなかかってんのという率直な御意見もありましたけど。いや、でも本当に一番最初はこども中心主義で、未来を委ねていくんだと考えると、その経費も必要である。けども、そのバランスも必要である

ということは議論いただきました。

前回、小学校においての問題、幼小をどう接続するかで、小学校の問題については、あまり深く議論できませんでした。これからしていくことになると思うんですけど、不登校の問題が低年齢化している。前回、少しこのお話の中に、いじめの問題と不登校の問題が小学校で非常に大きな問題になっていることを話していただきました。今日も資料を出していただいています。その根っこはどこにあるのかということも考えなければなりません。だから、小学校に入って、そこから小学校の先生の責任ですではなくて、その基になるところは、もちろんそれよりも前にあるわけです。こどもの成長発達は連続しているわけで、ある日、突然、小学校1年生の別人格になるわけではないので。そういうことを考えたときに、やっぱり就学前の基盤は重要になるだろうと考えます。

幼稚園をどうしていくのですかというときに、その問題をどう小学校につないでいくか。幼稚園の問題だからというので、そこで切ってしまうのではなく、それをどうつなぐのかが重要なのです。その一つの現れとして、不登校が低年齢化していることがあります。不登校が低年齢化しているのですが、いじめのピークは小学校1年生、2年生、3年生なんです。60万人ぐらいいます。信じられますか。僕は、それってどうなのと、いつもいろんな会議でお話しさせていただいて。不登校も低学年で起きるとなってくると、一体、何が小学校で起きているのという話になります。

それと同時に、多様性の話もここで出ました。小学校では多様な子どもたちが集まってくる。それは配慮を必要とする子どももそうですし、就学前のどの幼稚園、どの保育所から来るのかで、本当にいろんなところから、前回のお話だと、1人だけ入ってくる子どももいるんだというお話もあったかと思うんです。芦屋市では公立の幼稚園を中心に、いろんな形での就学前のやり取りをしている。ただ、それはうまくいっている3園のお話だったような気がしますけど、地理的な関係も、そういうことも含めて、ここで議論をいただきました。

2回ですけど、いろいろな問題点、実践をさらっとお話をさせていただいたわけですけど、そこをもうちょっときちっと具体のものとして深めていくことが必要ではないかと思います。

児童期の前半とか小学校低学年と幼児教育、今は幼稚園だけの議論をしていますけど、保育所も含めて、保幼小の、幼児期と児童期の連携が必要ではないかと議論をしてきたかと思っています。

今回、具体的にどういうことができるのか、どんなことをしてもらえるとうれしいか、そこを少しお伺いしていきたいと思います。

資料、今日、用意していただきましたけど、前回、不登校が増えてきているということで、低学年化していることがありました。それについて、資料を用意していただくと同時に円滑な接続、幼児期から児童期にかけての接続、保幼小の接続についての資料等を用意

していただいています。

それを参考にしながら、それぞれの委員の先生方の御意見をお聞かせいただければと思います。

○事務局（長岡） 資料の御確認をさせていただきます。

私からは、「不登校児童生徒の年度別変化」で、前回、第2回審議会の中で、芦屋の状況はどうかという御指摘をいただいておりますので、今回、資料を御用意させていただきました。また、文科省の円滑な接続に関しましては資料を御用意しておりますので、内藤から御説明させていただきますと思います。

では、私から不登校児童の芦屋市の状況について、A4の横で作成しております資料について、御説明をさせていただきますと思います。

御覧のとおり、若干の凸凹はありますが、令和に入ってから、特に不登校の児童・生徒が増えてきているという状況が、この表から見てとれるかなというところでございます。

国の動向もどうかというところで、文科の資料も一度確認をしました、例えば令和5年度ですと、芦屋市では小学校で2.41、中学校では7.96ですが、文科の資料によりますと、令和5年が国全体では2.14、中学校では6.71で、本市の場合は、少し国と比べて不登校の児童・生徒が多いというところでございます。

当然、それに対して、小中学校におきましては校内サポートルームも設置して、サポーターも全校に配置で、教室に行きにくい子どもさんについては、そういった居場所を確保しているところでございますし、またのびのび学級だったり、いろんな場所を御提供しているところで、日々、取り組んでいるところでございます。すぐに結果が出るというところ、なかなか難しいところはございますけど、地道に学校も含めて、努力しているところでございます。

私の説明は以上でございます。

○河合会長 あと、接続については。

○事務局（内藤） 幼稚園担当の内藤です。よろしくお願いいたします。

文科省の、右上のほうに「教育課程企画特別部会」と書いた資料を御説明させていただきますと思います。たくさん書いてありますので、それを抜粋しながら説明させていただきます。

まず、1枚目です。幼児教育は環境を通して行う教育と言われています。環境とは身近な自然や幼児が使う物、人、先生や友達もみんな環境の一つとして幼児教育は進んでおります。そして、その環境と関わりながら、こどもが感じたり、考えたりしながら成長していくことを大切にしています。

ただ、環境に触れて遊ぶだけではなくて、その環境は、先生たちが教育的な意図を持って、計画的に構成しているものことが大切だと言われています。それが1ページ目に書いてあります。

現に、幼稚園でも砂場でこどもたちが遊ぶのですが、ただ遊びなさいと言うだけではなくて、朝、こどもたちが来る前に砂場を耕して、こどもたちが遊びやすいように、思わず遊びたくなるような、ふかふかの砂を用意する、本当に地道なといいますか、派手な環境づくりではなく、本当にこどもの心が動くような環境を、意図してつくって遊びを進めていくといった状態になっております。

この環境に触れて、遊びながらこどもたちはいろんなことを学びます。その遊びの中で培った学びが、小学校にどうつながっているか、4ページ目の資料に書いてあります。幼児の自発的な活動としての遊びを通した学びが、小学校以降の生活や学習の基盤となるイメージと書かれています。

この中でも、幼稚園で遊びながら、こどもたちはもっと遊びたいとか、これ楽しい、明日もしたいとか、もっと楽しくなるように工夫したい、工夫しようという意欲を膨らませていきます。そして、意欲が膨らむように先生たちは環境を整えて、そして時には励ましたり、時には一緒に仲間になって遊んだり、見守ったりもします。そして、その遊びを通して、こどもたちはいろいろ考えます。必要なものは自分たちで運んできたりもします。そして、それをどんなふうに使ったらいいかも工夫します。また、先ほどお伝えしました、人という環境にどう関わったらいいかも、遊びながら学んでいきます。

こんなこと言ったら友達が嫌な気持ちになった、初めて出会う、そんな友達の困った顔を子どもたちは学びとして感じ取り、次に生かしていこうとします。それが、幼稚園、就学前の遊びの中で学ぶということです。そして、その遊びを通して考えて、工夫したことを楽しめることが大事です。次も僕が考えたことで遊ぼうと、こどもたちは自信を持ちます。その積極的な気持ちを持つことが、小学校以降の学習の意欲、自ら学ぼうとするとか、自ら関わろうとすることにつながっていくと考えています。そのことが4ページに書いてあります。そして、国はこのことを大事に継続して、小学校につなげて育てていきましょーと推進しております。

そして、今お伝えしました小学校につなぐということですが、次のページ、国が小学校へつなげていくことを、都道府県や自治体を中心となって進めるようにと、幼保小の架け橋プログラムの推進を行っています。この「架け橋期」は、5歳児から小学校1年生までの2年間で、連続性を持ってカリキュラムをつなげていくということです。5歳児から1年生に上がるこの間が途切れないように、育ててきた意欲を1年生につなげる、そんなカリキュラムをつくっていくことが大事だという推進を国はしております。そして、その進め方、作成の仕方が、それぞれの市町村や、施設によってさまざまな状態です。

芦屋市でも、幼稚園・保育所・こども園が、小学校に進むこどもたち、そのこどもたちが意欲的に生活できるように、そして学べるように、小学校の行事、いろんな体験ができるように工夫して、今現在、進めているところです。

私からは以上です。

○河合会長 非常に抽象的と感じてしまいます。それぞれのところで、円滑な接続の推進、資料3ページに、「幼児教育施設と小学校の両者が、相互に共通理解を図り、各園・校における架け橋期のカリキュラムの作成やスタートカリキュラムの充実等の取組も含め、円滑な接続を一層推進する方向性で検討してはどうか」。方策のところ、「学習指導要領との連続性を表形式やデジタルを活用して示してはどうか」、どうだろうという提案をしてくださっているんです。しかし、実際にこれを落とし込むのはどうなっているのか、現場で実際にどういうふうになっているのだろうか、本当にできるのだろうかという素朴な疑問が起きていきます。

御議論をいただいていくわけですけど、国が考えている「架け橋プログラム」で、先ほども内藤先生から説明があったように、それぞれの自治体で、それぞれの教育委員会の単位で取り組んでいる。そうなんですね、要するに取り組んでいいということですね。

ということで、我々が、今、これから考えていこう。今既に進んでいる、やっている実践していることを含めて、どんなことが可能なのか、それをよりよくするためにはどうすればいいのかという議論をしていきたいと思います。

○事務局（長岡） 一点だけ、追加で御説明をさせていただきたいことがございまして、内藤から説明させていただきました資料の10ページを御覧いただきますと、3「幼児教育と小学校教育との円滑な接続」という項目で、冒頭、会長からも御説明をいただきました、国においても、小学校低学年においてのいじめの件数が多いところと、また不登校児童・生徒数の増加が高いことが現下の課題であると踏まえまして、いじめ・不登校対策の観点からも、保幼小の接続期の教育の充実に取り組むことが重要であるということで、会長がおっしゃっていただいたことにつきましても、この資料の中で見えるかなというところがございます。

もう一点、「幼児教育施設と小学校の両者が連携の意識をもち、教育実践を見合い、相互の共通理解を図ることが重要。特に小学校入学当初は、幼児教育との指導方法の連続性・一貫性を確保することが重要」であるということで、それぞれの施設単位で考えることではなくて、就学前と小学校がお互いに連携していくんだという意識を持つのが非常に大事だと記載してございますし、教育の中身についても、お互いの先生方が見合うことも、やはり進めていく中では必要ではないかということの記載がございます。

その点について、少し追加をさせていただきます。

○河合会長 今、説明をいただきました。それでも、なおかつ具体のことが見えない。じゃあ、どうすればよいのと。作っていいのであれば作ろうではないですか、芦屋のモデルを考えてみたらどうでしょうか。それが、私に関しては、この委員会をお願いしたいなと思っていることで。

議論を整理したほうがよくて、最初にどういう連携のあり方、課題もあると思うんです。そなん、お金どうするんや。人はどうするのだとか、今、先生たちも手一杯。それ、課

題として挙がってくると思うんですけど。それは、最初に連携のあり方を議論していただいた後、そのことを実行するためにはどんな問題が起きるんだということで、議論をいただきたい。

西山幼稚園、小学校ごっこを、この前も紹介をしていただいたかと思います。いろんな工夫をされていると思います。そういうのも含めて、いや、こういうことが起きているよということを紹介いただきたい。前回も小学校、潮見、小学校の先生と幼稚園の先生が非常に密に行き来してしていると報告いただいた。そういうのも含めて成果、こんなふうにして、こんなことができてますよと、前回お話しされたことを少しかいつまんで簡単にお話しただいて。それをよくするためにはどうしたらいいのか、さらによくするためにはとか。理想とは言わないけど、こんなふうにしたいな、できるといいなということを、課題は置いておいて、お話をしていただければ。保護者というか、親の側からの御意見も含めてもいいですし。

田附先生、ほかの学校のこともしろいろ観察されたり、遊びのことも見られたりしているので、そういう視点からも、いや、こんな絶対必要やでということがあれば、ぜひ理想形というか、できたらいいなということを、一度、全部出していただけるといいですけど。

どなたからでもいいし、場合によっては成田先生からでも。今まで、書記的な役割でずっとメモされていたんですけど、今回からは、ちゃんと発達心理学者として、コメントを含めてお願いしますと会議の前をお願いしています。

武田先生、私立幼稚園というお立場ではありますけど、こうあったらもっといいとか。

○武田委員 人・時間・お金の問題を全て横に置いて、できたらいいなという理想を掲げるとなると申し訳ないですが、いろいろと、本当に実際の課題というか、問題にぶつかってしまうことがあったり。

例えば幼稚園、小学校から、幼小連携のことでいろいろお誘いは来るんですけど、すごく具体的な話ですけど、当園ですと、大体4月の頭で1年間のカリキュラムが決まってるんです。何月何日に何をやる、何をやる、何をやる。そうすると、ごめんなさい、行事があるから行けませんというパターンが多かったり、なかなか小学校の空いてる時間と幼稚園の空いてる時間が重ならなくて。そんな中で、幾つか行事を動かしたりとかできるようなことがあれば動かしたりとかしながら、今現状はなってる状態だなと思ったりします。といいますと、今の現状はそうです。

例えば、できたらいいなのカリキュラムでいきますと、芦屋市単体のカリキュラムなのか、あるいはこの近辺一帯のカリキュラムなのか、あるいは国全体でのカリキュラムなのかという、連携のやり方ですね、具体的なやり方とかを考えたときに、例えば市独自の具体的なカリキュラム、幼稚園の年長さんから小学校に向けて、こういうカリキュラムをしましょうという市独自のものをつくったとすると、他市の子たちはどうするんですかとか。

例えば私立幼稚園ですと、うちも西宮市とか神戸市からも通っております。じゃあ、神戸市の子や西宮市の子は、そこには参加できない。別の神戸市、西宮市のカリキュラムをしなきゃいけないのかとか、そういった具体的な問題ばかりが最近目についてしまいまして、なかなかできたらいいなの理想が、アイデアとして出てきていないのが今の現状なのかなと思ったりします。

先ほど、お話があった環境を通しての学び、そしてその学びが小学校の学びにつながっていくこと、とても大事なことで。恐らく、それぞれの園、それぞれの保育所とか先生方が、先生方なりに努力してやってらっしゃるのではないかなと思ったりします。

学びの連携と、いじめ・不登校対策との連携が具体的に繋がっているのかどうなのか、いま一つ分からなくて。こどもの学びへの連携が小学校とつながると思うんですけど、不登校って、それだけじゃないような気がするんです。最近、すごく感じているところで、前回、お休みだったので、前回もしかしたらそういう話をされてたかもしれないです、申し訳ないですけど。

不登校といたしまして、極端な例で申し訳ないですけど、例えば僕は50ぐらいですけど、僕らの世代って、学校休むってあり得なかったんです。よっぽど熱があったりとか風邪を引いたり、学校行かれへんわ、そういうとき以外は行くのが当たり前という選択肢だったんですけど、今のこどもたちって、ちょっと行きたくないな、じゃあ、休もうかみたいなのが、どちらかというと幼稚園の中にはあるかなと思ったりする。園によっても、それぞれだとは思うんですけど。今日はしんどいからお休みしようとか、あるいはちょっと疲れてるからお休みしますとか、そういうことは結構あるんです。

それが続いていくと、小学校に上がっても、ちょっとしんどいから、今日は行かないかな。ちょっとしんどいというのが、例えば友達同士の関係性もあるかもしれないし、学校の授業に対する勉強という面でもあるかもしれないですけど、そういう選択肢が僕のこどもの頃にはなかったな。そら、小学校に行ったら、気の合う友達もいれば合わない友達もいるので、合わない友達と一緒にやらなきゃいけないみたいなことだから、足取り重いなと思いつつも、まあ行かなきゃいけないものだったというか。じゃあ、ちょっとしんどいからいいかみたいな選択肢が、これは僕の勝手な、個人的な印象ですけど、増えてるような気はするんです。

と考えると、ただ単に学習とか学びの連携だけではなくて、もっと人との関わり、何になるのかな。もっと別の部分での連携が必要なのかななんて、今までのお話を聞いて感じておりました。

適当な理想形をお答えできなくて、申し訳ないです。

○河合会長 いや、いいと思います。こうなったらいいなというのを、要するに全国とは言わないけど、兵庫県の中での接続カリキュラムの設計ができたらいいなということなので。それを、課題のところにどうするかというので、具体的なものを落としていけばいいと思

いますけど。

学校との連携と、いじめ・不登校がつながるのか。委員長としてではなくて、研究者としての意見ですけど。それは、さっき言われていた学校の教育って何かとも関係していくんです。幼児教育と小学校の幼小の接続のところで切れているものは何か、この会議のところで少しお話ししたんです。小学校に行ったら何が変わるかという、教科が変わるんです。幼児教育は領域というか、その部分の接続のところであって。だから、小学校教育は、本当は両方ともやって、それは生活科とかいろんな中でやっているはずだけど、その部分が弱くなっているのではないかなと。

もう一つは、これはまた別の集まりでそういうのがあったんだけど、要するに教育の多様化が進んでいて、例えばYouTubeで、その集まりのときに出了のはYouTubeで、小学校4年生の授業の様子を、6分間で掛け算のX掛けたらというのをやって、それを45分の授業の中でやっても、クラスの中ではこれほど圧縮してはできないという。直接、ここは関係ないけど、何が言いたいかというと、YouTubeでも知識教育はできるし、学びの形も多様です。学校で学ばなくてもいいということが選択肢として、それ以外の学びの場もあるということになってきて。多様な環境の中にこどもが置かれるので、別に、学校行かなくてもという選択肢が得られるのかなと思います。

答えはここで、また議論していけばいいと思うんですけど、いわゆる知識の学習と同時に学校教育はもう一つ別の。先生が言われた人の教育というか、人を育てるという機能があると思います。今は非認知的能力で、探求ということで、柱として知識を暗記教育で覚えるだけじゃなくて、自ら学ぶということも推奨されています。だから、知識教育に加えてもう一つの柱が、実は幼児教育から上にずっと生えていって。だから、根っこが深くて広くてというものがないと、大きな木はそこに育たない。その問題はどうなんでしょうか、そういう。だから、根っこの部分をもっと豊かにしたいな、できたらいいなという御意見なんだと思いました。こういうのでいいでしょうか。

○成田副会長 心理学的な用語でもあるのですが、よく言われるのが「こころ」の3要素である「知情意」です。「知」というのは知識。今、河合先生がおっしゃったように、YouTubeでも何でも知識はいっぱいあるんです。「情」と「意」の部分、「意」は意欲・意思、「情」は感情・情緒で、これら両方を含めて教育が成り立つのだらうと思います。そこは、幼稚園もそうだし、小学校もそうだし、育てていく必要があります。もちろんこの問題は、中・高でも当然、教育的課題として必要になってきます。

河合先生おっしゃる根の部分としての「情」と「意」の教育の部分、どのように幼保小連携の中でやっていくのかが問われます。きれいにまとめるとそんな感じになるのかなと思いますが、実際のところは口で言うほど簡単ではありません。実際には、「知情意」の教育実現のためには、どうしていくのが良いのか。現在の芦屋では、どのような課題があって、限りのある予算・人員配置の中で一体何ができるのか、ということになるのかな

と思っております。こんなところでよろしいですか。

○河合会長 和むような。いや、何かつくっていかうと思うと、和まないと。形で議論していてもあれなので。

いや、知識は、我々もそうですけど、僕が院生の指導のときに言う、知識は、昔だったら図書館に行けば分かった。だから、図書館のどこにどういう辞書があるかって分かれば、それで知識は得られる。だから、大学院で学ぶというのは、知識じゃないんですよとよく伝えていたんです。今、それが極端になってきて、待てないというか、すぐ何かあれば。スマホで。だから、私が発言して、すぐに先生、ちょっとこういう意見もありますけどと言われるときもあって、こっち側がすごく、たじたじとすることが多くなっています。

だから、知識はそうなんです。でも、やっぱり心というか、その辺をどういうふうに耕すのか、幼児期で行われているいいもの。1回目のときかに言ったかもしれませんが、小学校3年生ぐらいまでで、幼児期でつくったものが壊れるという、そういう御意見をお持ちの、別の先生がおられたというお話をしたかもしれません。いや、知識を重くしていく。

今日、帰って調べられたらいいと思いますけど、文科省が全国学力テストの経年変化の分析をされています。7月に出したものです。そこに経年変化で成績、いわゆる学力と言われるものを比較しています。小学校も中学校も下がってる。経済状況なんかと、それが関係しているという。保護者の方にも聞いている、テレビゲームというか、ビデオとかゲーム、スマホはどれぐらいか、その時間は増えている。だから、増えているものと下がっていつているものの関係って、当然議論される。それは知識のお話です。

だから、国も大変なんだと思います。文科省は。片方では、やっぱり世界的な競争力とって、学力の問題があって。理系離れという問題があって。片方ではいじめとか、重大事案が増えてきています。それに対してどうするのか、低学年化が進んでいる。教育が多様化して、いろんなところで学べるようになってる。

本当に教育現場は、非常に厳しい状況にあるんだと思うんです。その中でも、私たちは提案ができる立場にあるので、今言われたようなこと、根っこをどういうふうに広げるのか、どういうふうに耕すのか、提案していけるかなと思います。

いかがでしょう、巽先生。

○巽委員 根っこをね。

○河合会長 また、2人で掛け合いしながら。

○巽委員 私も、幼児期の人間形成の土台となる時期ですので、どれだけ根っこを広げていくかということがすごい大事なベースで、よく保護者に伝えています。それを小学校への接続という意味では、潮見幼稚園は環境的に恵まれているので、前回の御報告よりも、またさらに新たに御報告できるような、うれしい内容もあるんですけど、まずは皆さんに話していただいて。私、しゃべり過ぎるんです、いつも。時間があれば、ちょっと御報告さ

せていただきます。

○河合会長　そうですか、いい便りは後で。

○巽委員　そうですね、うれしい内容があります。

○河合会長　では、伊賀先生のほうから。

○伊賀委員　保護者として、もし連携を望むならという立場でお話しさせていただく。一旦、お聞きしたいですけど、いじめも低年齢化してるというのが出てるっておっしゃってたんですけど、低学年の子がするいじめの内容って、どういったものになるんでしょうか。質はどんどん変わって行って、私の思ういじめと低学年の子が実際にしてるようないじめは、まだ幼稚園の子たちが、おまえはドッジボールが下手だから入れてあげないレベルの、ちょっと入れてあげないというレベルのものなのか、本当に無視だったり、物を隠す。ちょっと本当に根っこに、高学年に行くような悪質なもののなかというのとはわかりますか。

○河合会長　それは、教育委員会から。

○事務局（尾上）　学校教育課の尾上です。よろしくお願いします。

低学年のいじめについては、そんな陰湿なものではなくて、どちらかというと、ちょっと嫌なことがあったと、ぱっと触られても、それが嫌と思った時点で全ていじめという認識になってしまいますので、どうしても数が、1年から3年が急激に多くはなってくるんです。その中で、生活する中で、これはそうじゃないということが分かり始めて、だんだん4、5、6年生になったら、その数は下がっていくんですが。ただ、4、5、6になると高学年になっていきますので、先ほど言ったようなところも、実際はあるのかなと思っています。

○伊賀委員　それであれば、私が親として望むことは、幼稚園のときだったら、皆さん、小さい子どもたちはみんな仲よく遊んで、嫌なことがあったときに嫌と言えない子もいるし、嫌と言える子もいるけど、結局、そのときに先生が気づいてくださったり、周りの子で気づける子がいたり、いろんな複合的な要素で、結局、先生にも相談しやすいとか、こどもの相談乗りやすいという環境だったりで上手に解決できることもあれば、解決できなかったとしても、寄り添うことができたりするような状況で、何とかやっていけてるのかなと思ってて。

小学校に入った途端に、嫌なことを嫌と言う環境になりにくいのかな。今まで、全部いいよ、いいよ、好きなことやっていいよというものが、ルールが生まれてくるじゃないですか。人が多いことによって、小学校なので。私は、全然、それは否定はしてなくて、それも大事な、みんなと行動する上で大事なことだと思ってるので。みんなと合わせることも一つだよと教えるのも大事だと思ってるので。

そのときに抜け出す子がいるとか、そのときに怒られるとか、いろんな子、状況がいきなり変わってくるのあれですけど、嫌なことされたときに、それ嫌だって言いにくい、言えない環境だったり、話合いができないとか、聞いてくれないとか。

先ほど、幼稚園教育で、人との関わり合いで、こんな困った顔をすることも学びなんだという話もおっしゃってて。まだ、機微が難しい年頃だとは思いますが、そういうのをすくい取ってあげられる、誰しも、誰しも、難しいですよね、すみません。情緒に対しての連携を、すごい望むかなと思います。

それは、別に先生個人個人に、うちの子はこういう子やからとか、あの子はこういう子やから、気をつけてあげてくださいと、全ての子のことを担任の先生にお伝えしてほしいという意味ではなくて、情緒を見られるような環境であってほしいなと、1年生2年生のとき、どの学年に上がってもそうでしょうけど、そういうこととか情って、知と情を育てるのを、幼稚園、小学校の連携としてつなげてほしいかなと、もし望むことがあるとしたら、そんな感じです。

○河合会長 根っこの部分、さっき武田先生が言われた、共通してるところだと思います。小学校でも、そういうふうにしてほしいと。

○伊賀委員 でも、幼稚園のような、全てすくい取るとか助けてあげるということではなくて、自分で意見言えない子も言えるようになってほしいし、嫌だと言われたときに、すつと引いて、何が嫌だったのと聞けるような、お互いが歩み寄れるような人間性に育てられるような環境であってほしいなと思いますね。

○河合会長 片方では知識が必要だし、自ら何かをつくり上げる力も、自分がこう思うんだけどと言う力も、自分の中でそれがあるから言えるので。そういうことに気づくような力や気持ちって重要ということですね。

○伊賀委員 そうです。

○河合会長 野村先生。

○野村委員 私は、不登校のことが気になってて。今回の資料、ありがとうございます、説明もいただいて。結構、多いんだなと。

私、それこそ、先ほど先生がおっしゃってたように、昔なんかそんな選択肢ないでしょうという感じだったのが、今は休んじやうところが、その延長で小学校も休んじやうというだけじゃないと思うんですけど、随分とハードルが低くなってるのかなというのと、恐らくいろんな背景がそれぞれあると思うんです。こうやって数字で見ると、すごいなと。あと、さらに中学校に行くと、おお、という感じ。それは、よくお友達のお子さんと、中学生いらっしゃる方は、本当、クラスに二、三人は普通にいるみたいと言うので、なるほどと思ってたんですけど。

先ほど申しましたように、いろんな背景、それぞれ不登校になる子たちっているとは思いますが、いろんな事情が。でも、小学生とかでも、だんだん幼稚園から小学校になって、教科で学校、時間割でってなることによって、学校のほとんどの生活の時間を勉強に費やすじゃないですか。その中で、もちろん友達関係で嫌なことがあって休む、嫌だな、学校行きたくない、おなか痛いってなる子もいれば、一方で、高学年になると勉強がついて

いけないとか、そういうのがあるんじゃないのかなって、私、何となく思ってた。特に、それが中学になると。遅れ出しちゃうと、もう追いつけないぐらいの遅れになっちゃうと思ってた。

これは、私、前々からずっと思ってたんですけど、学校の学び自体を抜本的にというか、変えたほうがいいんじゃないのと、個人的ですけど、思ってた。じゃあ、どういうふうに変えるのかというと、例えばですが習熟度別であったり、突然ごめんなさい。

何でそんなこと言うかということ、うちこどもが海外の小学校、中学校に、海外では日本人学校だったりインターだったりに通っていたり、あと高校は東京の私立の高校に通っていたり、国立の中学校に通っていたり、県立の高校に通っていたり。うち2人こどもいるんですけど、いろんな国のいろんなスタイルの学校に、結果として通わせてることになってるんです。

そんなのを見てると、習熟度別授業をやってる学校が幾つかあって、そこが、こどもたちも生き生きと自分のレベルに合った学びができると、私は親としてすごく感じてるんです。

これって、なかなかシステム化して、例えば市の教育に落とし込むのってすごい難しいと思うんですけど、そのような私の感想について、皆さん、市のほうでこんなことやるよとか、こういう議論が実はあるんだよとか、もしあれば教えていただけるとありがたいです。

○河合会長　いかがでしょうか。

○事務局（尾上）　習熟度別ではないですが、実際に勉強がついていけないこどもたちが、特に中学校になるといところがある。それが不登校につながるという事例も、やはりあるのは事実です。

ただ、そういうことがないように、こどもたち、今、ここ最近、それこそ市長が「ちょうどの学び」という形で、一人一人に応じた学習環境だったり、手法といいますか、方法、学びをやっていないといけないと、これは、実際、芦屋市で昨年度からスタートしている、考えているところではあるんです。

ただ、そこは習熟度ではなくて、同じ環境の中でどのように、一人一人に応じた授業ができるのかを、研究、推進していかないといけないなというところで、今現状やっているところがあるかなと思います。

ただ、もう一方で、兵庫県も学力を考えてまして、習熟度別にはならないにしても、例えば少人数学級ですね。今、国は40人が小学校は35人になったり、中学校も40人が35人、来年度からなっていく予定ですけど、さらにその分もどうかしていかないといけない部分もありますし、例えばよく言われるのは数学はとても難しいので、その部分は2つに分けてという形で進めている部分がありますので、完全にそこにニーズ、思いには応えられてはいないかもしれないですが、今、そういう動きはあることは知っていただけたらなと思っ

ています。

○野村委員 一つ、学校に行くのは勉強が楽しいからというのがあるといいと思うんですけど、例えば勉強が遅れてるから行きたくないという子もいれば、進み過ぎちゃってつまらないという子も、一方で実はいるじゃないですか。だから、その辺の子たちの学びに対する動機づけというか、モチベーションを上げるにはそれぞれに合った、そんな細かいことまでできないと思うんですけど、ただ一方で私立って、そういうのが結構きめ細かかったりするから、できたらいいな、なんて思ったりしたり。でも、いろんな取組していただいているということで、ありがとうございます。

○河合会長 少し高学年のお話になりましたが、同じことだと思うんです。それこそ、小学校1年生の4月には、年長によくなくなったこどもと、2年生になったこどもが一緒に入っているわけで、その辺りは、学校の先生方も本当に苦労されて、対応して、クラスを考えたりとかしてくださってるんだと思うんです。それも、あったらいいなという幼児期と小学校をつないでいくときに、そのクラスはそれぞれのこどもの能力というか、何かを習熟しているかどうかではなくて、持っている力に応じて編成できるといいな。そういう御意見かと思いました。

田附先生、そろそろ。

○田附委員 いろいろとお話を伺いまして、ありがとうございます。何か議論が大きい議論と、細かい事例の議論と、いろいろ出てきているので、ちょっと整理をさせていただきたいですけど。

こどもたちが長い人生を考えたときに、幼児教育が、何が大切になるのかが、多分、議論の中心になっていて、人生の流れの中で、今、お話が出ていたのは保育と幼児教育と、それから小学校までの連携という形でお話をされていたのだなと感じております。

じゃあ、どうするのかというのは結局難しいですけど、不登校のお話も具体的に出てきてますが、例えば幼稚園時にこどもの数が少ないクラスにいと、その後、不登校になるのかというとおそらくそうでもなくて、芦屋市の場合は公立の幼稚園のこどもたちが少ないということは、小学校にはいろんなところから来ているということですので、こどもの多い私立の幼稚園から来ているこどもたちのほうが、むしろ多いのではないかと。これ、数見てないので分かりませんが、感じています。そうすると、少ないところから来た子が不登校になって、多いところから来ている子はなっていないわけでもなく、おそらく人数は関係ないんだろうなと。

そのところは、何となく印象的な議論は避けてくて、結局は、こどもたちにとっては多い集団にいるからいい、少ない集団だから悪い、また逆もあるわけではなくて、もっと別の要因があるのではないかと考えてみたいと思っています。

ただ、それをどのように考えるのかといったときに、今、手元に資料はないですけど、最後におっしゃったように、習熟度別という話も出てましたが、私の個人的な事例も含

めて言いますと、私も2回、これまで1年間、ドイツに滞在をしたことがありまして、1回目の滞在のときはこどもを皆連れていきました。3歳、5歳、8歳で、現地の小学校に一番上は1年間行って、真ん中は半年幼稚園、半年小学校で、一番下は1年間幼稚園に通いました。帰ってきてから、なかなか公立の学校の先生には言いにくいことですけど、先生方がどうのこうのではなくて、日本の学校、こどもが1クラス多過ぎるよなと思ったわけです。

ドイツの小学校は1クラス20人です。うちのこどもが行ってたところも、外国人が多いとはいえ、20人のうち15人がドイツ国籍ではない、ドイツで生まれていてもドイツ国籍ではないというこどもたちです。その中で、言葉の問題、ドイツ語の問題も含めて、先生は苦労しながらこどもたちに教育をしていたけれども、保護者との連携がすごくうまく取れていて、ある意味、いいなと感じました。

帰国後、偶然、当時は宇治市に住んでたんですが、宇治市の笠取という山間部が少子化で、通学区域外を議会に上げて、通したんでね。その小学校は、6学年で24人分の教室しかありません。つまり1学年4人分しかスペースがないところです。うちのこどもは、真ん中と下がそこに行ったんです。その卒業生も人数が少ないからといって、中学校に行ってから何か問題を抱えたという例はなくて、むしろ、きちっと自分の意思を持って行動できるこどもたちに、今も交流がありますし、笠取小学校の学校運営協議会の委員を私もやっておりますので、学校の様子も今分かってるんです。だから人数が、恐らく多い少ない、もちろん多過ぎたら駄目ですけど。という議論よりも、むしろ、その中身をどうするかという議論に私たちは集約していったほうがいいのかなと一つは感じました。

先ほど、習熟度別というお話が出ましたけど、私たちがこどものとき、勉強ができなかったら、苦手だったら、好きじゃなかったら、クラス分けられてうれしかった、ありがたいかというところはどうだろう。これ、日本人のメンタリティと私たちが受けてきた教育で、みんな横並びのほうが安心だと、いわゆる同調圧力みたいな、あるんだろうなと思います。それをどうしていくのかも、結局は知識を学ぶことだけじゃなくて、私たちがどんなふうを考えて感じて、こどもたちとどうやって接していくのか、それが、恐らく多様性を認めることにもつながっていくんだろうと思うんです。

具体的な話ではないですけど、皆さんのお話を聞いていると、まず私たちが、本当に多様性というか、人との関わりを、ちゃんと個性を認めて、特別視するのではなくてということが大切なのかなと思いました。具体性がなくて、申し訳ないですけど。

委員長が真ん中ぐらいのところ、学校は何をやる場所だということで、知識だけなら、ほかでも学べるとおっしゃいました。そのとおりで、私は、学校は考えることを学ぶ場所かなと思っています。

今年の夏も学生さんと一緒にドイツの学校を訪問して、英語と体育と数学の授業を見学してきたんですけど、向こうでは手を挙げて発言することが一般的なわけなんです。

ためには考えないといけないということです。

学校がそういう場所ではあるんですが、でも、そこには幼稚園も学校も、私たちが勤める会社も社会も、まずは根っこに人との関わりをどうしていくのかという意識を私たちが持っていて、その上で、学校は知識を学んだり、考えたりする場所と捉えていかないと、結局は、学校は人のお世話をするところなのか、何をするところなのか、先生の負担がすごく増えていくのではないかなと感じました。

提案ではないですけど、幼稚園の園児数が今、減っております。でも、保育所は、前回、前々回の資料では、人数はそれなりに充足されている。例えば、保育所と幼稚園を一体化することはできないのかなと思いました。

結局、幼稚園は長い時間預かってもらえないので、公立幼稚園、よそ行ってしまうことになるので。そういう取組どっかやってないのかなと思ったら、さっきの資料に、北海道の資料がございましたけど、北海道東川がどうもそういう取組をしているようです。特区になっているようです。

お配りいただいた資料には東川のことは載ってないですけど、私が、そういう取組をしてないのかなと。いただいた資料、北海道は幼保小です。私が調べた東川の資料は、幼保一元化特区で、幼稚園と保育所を合同で一つの施設といいますか、建物の中でこどもたちの教育を担うことをされていました。そういうのも一つ、モデルになるんじゃないかなと思って、今までの私の話のまとめではないですけど、お話をさせていただきました。

取り留めなく長くて申し訳ないですが、以上です。

○河合会長 一言でまとめてしまうのはいかんですが、しかし人間関係というか、関係性がコアにあるんだ、そういう御意見だったのかなと。方向でいくと幼保、接続するとか、一体化する。実際には、また後で本市でもそういう取組もされているかと思うので、お話があるかと思うんですけど。それも含めて提案できたらいいなとか、これからの幼稚園のあり方としては、保育部分も含めて一体化していくという提案と、あとは個性を認めるようなことが、個性を認める心が育つような幼児教育ができるといいなという御提案をいただいたということかと思います。

本市の取組で。

○事務局（長岡） 田附委員の御提案について、今の現状、芦屋市の状況を御説明させていただきますと、恐らく、幼保連携型の認定こども園をイメージされているのかなと思うところがございまして、本市におきましては平成29年以降、幼保のあり方を策定して、いろんな施設整備に取り組んできた中で、公立で2園が幼稚園と保育所を統合させて、幼保連携型の認定こども園を設置しているのが現状です。

またその際に、幼稚園の敷地を活用するという御意見もございまして、市立幼稚園の敷地を活用して、民間の保育事業者を誘致して、民間の幼保連携型の認定こども園を数多く設置したということでございまして、実態とすると幼稚園と保育所の機能を併せ持つ、そ

うということについては相当整備しているのが現状でございます。

以上です。

○河合会長 巽先生からいい話もあるということだったんですけど。

○巽委員 潮見タイムというお話を前回させていただいたと思うんです。潮見幼稚園は潮見小学校と隣接しておりますので、20分中休みという小学校の中休みの時間を利用して、令和5年度から、幼稚園から小学校1年生の先生にお願いして、一緒に交流しませんかということで、令和5年度は月2回から始まりました。

月2回潮見タイムを行った結果、1年生がとっても生き生きと幼稚園の環境で遊んで、さあ、令和6年度どうしようといったときに、小学校の先生から、小学校に不登校ぎみといただきますか、行きにくいお子さんたち複数が、潮見タイムがあるなら学校に行きたいと言って、来るようになったので、ぜひ潮見タイムの数を増やしてもらえないかという提案がありまして。できれば毎週何曜日という形で固定化すれば、こどもたちにもはっきり分かるしということで、令和6年度は毎週水曜日と固定化して、潮見タイムを行いました。

5年度は月2回、イレギュラーな2回ですので、そのときは1年生、お客さんのような形で、どうぞ、幼稚園のおもちゃで遊んでくださいということで、ザリガニ釣りの釣りの道具は、未就園児用に用意してある釣りの道具を1年生にその日だけお貸しするという状態だったんですけど、毎週水曜日となるのであれば、1年生も、次あれしたいなという思いをもって、自分で作って持ってくる方法にしませんかということで、1年生の先生と相談しまして、令和6年度は、やりたい子が一部持ってくるようになったということだったんですけど。

毎年1年生が落ち着いた2学期から潮見タイムをしてたんですけど、令和7年度は1学期から、まずは2年生から始まりまして、1年生が落ち着いたの運動会後には1年生も来るようになりまして、幼稚園の環境で生き生きして遊ぶことと、それから自分たちが幼稚園児よりもお兄さん、お姉さんなんだという意識もあって、小さい子に優しくしてあげるような場面も見られまして、恐らく小学校の先生も、とても喜んでくださってる状態だと思います。

前回ちらっとお話ししたと思うんですけど、小学校の生活科の「なつとあそぼう」だったかな、水遊びの単元を、本当は1学期の教材ですけど、2学期が始まって、やはり学校に行き渋る子もいるのではないかという予想を立てて、8月27日の始業式の2日後の8月29日に、潮見幼稚園の園庭を使って、生活科の2時間の授業を合同でしました。

小学校の中庭には、1年生が作った的当て、教科書にも載ってる生活科の教材、それぞれ1年生が作った的に、自分の家から持ってきたマヨネーズのパックだったり、幼稚園がお貸ししてる水鉄砲で的に当てる。幼稚園は4つのコーナーが、普段預かり保育で遊んでいるような4つのコーナーを作りまして、氷絵の具コーナー、ザリガニ釣り、もしくはおもちゃの魚釣りとシャボン玉コーナー、スライムコーナー、この5つのコーナー遊びを、

小学校の1年生の先生と幼稚園の先生プラス、小学校、幼稚園のPTAの保護者の方がお手伝いくださいまして、こどもたちが5つのグループに分かれて、それぞれ全部のコーナー遊びを全てできるような形で当日迎えまして。本当に1年生の子たち、すごく喜んで帰っていきました。

釣り竿を家から作って持ってくる子がすごく多くて、すごく1年生、根気があって、やっぱりすごいなと思って、よく釣ってたんですけど、5グループ目ぐらいになると、さすがにザリガニも賢くなってきて、おなかもいっぱいになったのか、なかなか釣れないで、1人、時間切れで、釣れなかったって、泣いて帰った1年生がいたんです。次の潮見タイムのときも、また持ってきていいからねということで、その子はまた、ほかの子もそうですけど、次の潮見タイムに多くの子が釣りざおを持ってきたりして、本当に嬉々として釣りを楽しんでいました。

3年間で、だんだんこどもたちも主体性がすごく発揮されて、1年生もそうですし、昨日の潮見タイムでは、幼稚園の子のバランスローラーという乗り物があるんですけど、それを、普段だったら怖いからしないという子が、知ってる1年生のお姉さんが手をつないでくれるならするということで、昨日は、あの子がしてるってうれしかったです。そんなふうに幼稚園の子にとっても、小学生にとっても、お互いが刺激し合って、いい関係の潮見タイムが引き続き続いています。

その生活科がとってもよかったので、今度は1年生の図工の授業に砂遊びがあるそうですけど、小学校の砂場は水道も遠いし、おもちゃもそんなになんないということで、来週3日間、1組、2組、3組ありますので、一クラスずつが3日間、1時間、図工の授業として幼稚園の砂場を使いに来てくれることになりまして、そしたら、自然な関わりも生まれてくるかなと期待しております。

もう一つは、向かいの潮見中学校の3年生の家庭科の授業で、コロナ前までは3年生の家庭科の授業として1時間、幼稚園児と遊ぶという時間があったんですけど、コロナですって中止になってまして、今年から再開したんですけど。今回、クラスが、向こうは4クラスで120人ほど、こちらは25人しかいないことで、4クラスが一クラスずつ、4日間来てくださったんです。

夏休みの宿題の手作り絵本をそれぞれが作ってきたのを、まず5チームか6チームぐらいに分かれて、対面で自己紹介したり、それを読んでもらったりして。後半は、中学生が考えたゲームでその日、遊ぶということで。幼稚園児は、中には最初、大きいお兄さん、お姉さんが来て、ちょっと怖くて泣いてた子もいたんですけど、4日目になったら、帰らないでと言うぐらい抱っこしてもらったり、ひざに乗ったり、楽しい時間を過ごさせていただきました。

中学生は中学生ですごく顔がほころんでとってもいい、また来たいって、帰ってくれたんです。4日間が終わってから、この間、また中学校の先生からお電話をいただきまして、

当日、欠席してた子がいるので、その欠席してた子に、別日にもう一回行かせてもらってもいいかという、うれしいお電話でした。そのぐらい中学生にとっても、幼稚園の子は、もちろんお兄ちゃんお姉ちゃんに優しくしてもらえて大喜びですし、中学生も小さい子にいたわったり、かわいいと思ったりという気持ちが育って、大切な時間となったんだなということであれしく思いましたので、引き続き、これは来年度もしていきたいと思いますので、本当に接続の大切さを、改めて感じているところです。

お祭りのその日限りではなくて、継続した自然なつながりが今後もできていったらいいなと願っています。その中で、先ほどおっしゃっていた情緒の部分だとか、そういう面が育っていくのかなと、昨日、手をつないでくれたあの女の子のことを思ったら、すごくうれしく思っております。

以上です。

○河合会長 前回、田附先生からかな、いや、幼稚園のこどもは分かるけれども、小学生とか、お兄ちゃん、お姉ちゃんにとってはどういう意味があるのか、そういう質問があったかと思います。小学生も生き生きとして。多分、心理学で、そういう言葉で言うとメンター、よく言います。少しだけ能力のある人が、それよりも能力のない人を手伝うことによってお互いがよくなっていく、そういうことなのかなと思いました。

もう一つ提案として、大事なものは、イベントではなくて、行事ではなくて、継続する。それは、きっと継続するための仕組みを、今は潮見タイムでスポット的にやってるけど、そうではなくて、それを芦屋市の中で、やりたいと言うところは全て使えるような仕組みに落とし込むことが必要なのかな。要するに持続性ですね。

だから、そここのところは持続性のある交流の場というか、その仕組みをつくる、そういう御提案と受け取らせていただきました。

近藤先生から。

○近藤委員 それぞれの園の校区の小学校、中学校との関わりはいろいろあるんですけど、接続と交流という面から言うと、少し前、皆さん、幼稚園のことはお分かりかと思いますが、就学前の保育所とか民間園との交流はどうなってるのかという点では、以前は保育所と幼稚園が管轄が違うというか、教育委員会と市長部局なので、同じ就学前の5歳児でも幼稚園は幼稚園の5歳児で交流する。やっぱり5歳児になると、もう少し人数が多い集団も経験したいということもあるので、秋ぐらいに交流会があつて。保育所も市内の6園の5歳児が集まって交流は、交流会をしていたんです。

数年前、幼保一元化が出てきた頃から、管轄の中の5歳児の交流も大事ですけど、やっぱり同じ小学校に上がる校区の5歳児の交流って大事だよなということで、校区ごとの幼稚園と保育所、私立の幼稚園さんも一緒に「なかよし運動会」が、潮見地区とか岩園地区とか、地区ごとの交流とスタイルに変化してきて。保育所だけの5歳交流会というのはなくなって、地区ごとで会うことで同じ学校に行くねという横のつながり、1人で行くんじ

やないよ、みんなで行こうねみたいな交流につなげてきたんです。「なかよし運動会」は小学校の校庭をお借りして行い、少しずつ学校とのつながりも出てきて、前回も言っていたように、「小学校ごっこ」など、いろいろ小学校からもお誘いをいただいています。

秋頃に、小学校の1年生が授業の一環で、5歳児さん、年長さんを招待しようという授業があります。授業の中で何時間もかけて、先生方がカリキュラムを作って取り組まれるんです。それは、学校によってそれぞれだと思いますけど、例えば朝日ヶ丘小学校の場合、まずは小学生が朝小の自慢は何？と考えて、朝小は給食がおいしいということで、そしたら、学校の先生が、給食体験はどうか。そこに関連付けて、学校に招待してあげる日まで、そこを目標として授業を積み上げてくださって。

まずは、学校の栄養士さんとのお話から始まって、給食にはこんな栄養があるということとを学んで、今度は、それを5歳児さんに教えてあげるには自分たちはどうすればいいとか、毎時間毎時間、ここを目標、ここを目標と先生方が考えてこられて、実際、呼んでいただく。その授業の途中経過も、私たちは研修で学ばせていただいて。小学校ってこんなふうに授業を積み上げていかれてるんだなというのを見せていただき、少しずつ学校の授業内容も知るようになってきたんです。

その日の行事だけではなくて、こんな何時間もかけて、1年生が授業の中で学んで用意してくれてたんだなと思って。1年生は、ちゃんと1時間ごとに最初にねらいを自分で立てて。授業ごとに振り返りのタイムがあるようですが、最後に振り返りを自分で書いて、そのシートを先生に提出して、その授業が終わるというようなことを、小学校もいろんなスタイルを考えながら、学びにつなげておられるのだと思いました。

あったらいいなみたいなことは、接続のところで、その1年生が今やってることと5歳児がやってることが、本当にスムーズにつながるのが理想ですけど。

今日の資料を見たときに、幼児教育のスタイルって、環境の保育なんです。「領域」はあるんですけど、今は〇〇の時間だよとか、教科はないです。小学校には教科があって、1時間目、2時間目ってあるので、それは当たり前ですけど。大人にとっては当たり前、幼稚園が終わったら、次、小学校では1時間目、2時間目と思うけれど、入学したこどもたちの4月、5月って、まだ心も体もそこに届いてない。だけど、保育所と幼稚園のときは、あんなふうに自分のやりたいことを突き詰めて学んでいたのが、どうして1時間目、ぷつんと切れて、次は算数なんだろうみたいなところはあると思います。がらっと変えてほしいとか、そういう意味ではないですけど、そこで、ちょっとマイナスの気持ちになっちゃうのかな。どこでつまづくのかなというところを、大人たちが考えるための接続期のカリキュラムを一緒に考えていけたらいいのかなって。

今の1年生の授業は、すごくそのスタイルを配慮してくださって、春は教科で区切るようなことも最初はされてないとも聞くんですけど、そこを踏まえた上での1年生のカリキュラム、5歳児の最後のほうは、そうやって1年生になっていくよと。これまでも、小学

校に期待を膨らませるというねらいも持ちながらやってきましたが、もっと中身を知った上で、お互いが話し合いながら、つくっていけたらいいのかなと思ってます。

私も、いじめとか不登校のために接続カリキュラムをつくるものとは、あまり思っていない。それが一番とは思ってないですけど、やっぱり1年生のつまずきは何なのかは、カリキュラムでちゃんとおさえておかないといけないのかなと思っています。

そうやってつくらないと言いながらも、就学前は就学前でいろんな行事があり、カリキュラムをつくってる中で、小学校の先生たちも、本当、お忙しい時間を過ごしている中で、一緒に考えようと言っても、どうやって考えたらいいのか、どんな時間を取ったらいいのか。これって1回集まって決まるものでもないのに、何時間もかけながらつくらないといけない中で、小学校のことも知りたい、こっちのことも伝えたい、そういう人員がなかなかいないというか。

会議の日程を設定するが必要ですけど、なかなか人も足りない中で。所長や副所長も保育に入ることもある中で、なかなかつくれない。これは、ちょっと言い訳みたいな感じかもしれないですけど。本当につくっていかないといけないね、急がないとは思ってるんですけど。

小学校との連携もすごくあるんですけど、中学校の先生方もすごく気にかけてくださっているというか、例えば西藏こども園の5歳児が精道中学の運動会に、トライやるでの関わりがあった後に体育祭に呼んでくださって。5歳児さんが、クラスごとのカラーのポンポンを手作りで作って、持って行って応援されたんですけど。私たちから見たら5歳児って大きいと思いますけど、中学生から見たら、純粋でかわいって言うてくれる。そのかわい、いとおしい、大事なものを壊さないようにと思う気持ちを中学生のときに感じる機会があるって大事だなと思うので、中学校の先生方とも関わりが持てたらいいなと思ってます。

○河合会長 いえいえ。実際の活動を含めて、御説明いただきました。やっぱり接続のところで考えないといけないことというか、できたらいいなというところでいくと、小学校に入ってから教科教育への接続の仕方。さっき、授業時間ごとに切れてしまう、こどもからすると今までやって、ようやくエンジンがかかってきたときに、はい、ここまでで、休み時間です。そういうものをうまくつなげるような相互補完が、接続期のカリキュラムの中にいうか、教育課程の中に組み込む、そういうものができないかなという御提案をいただいた。

課題というよりは、そういうことができると、こども自身のやる気というか、気持ちと合うんじゃないかなということと。

後でお聞きしますと言って、今、実践のことばかりお聞きしたんですけど、課題の中に入ってくる、実際は人がいないというか、一生懸命やっていただければいただくほど、時間的な資源とか労力という資源をそこに使うことで、先生方に負担がかかる。その辺も問

題なのかなと思います。

今、委員の先生方のお話を聞いていて、それをマネジメントするようなセンターといいますか、芦屋はどういうふうになってるのか、後で資料も含めて事務局から少し説明いただくことで、やっぱりセンターというか。

センターというのは、中国語で言うと中心と書くんですけど、全体を調整するような、それぞれの幼稚園が今機能を持っています。連携している小学校とか、協力してくださっている中学校と調整していくんだけど、全体を通じて、いや、芦屋全体でこういうことしたらどうということを発信できるような、それらを統合するようなプラットフォームづくりをしていただかないと、このままで行くと、1個1個の1園1園になってしまうので、全体として子どもたちを伸び伸びと、本来持っているそれぞれの力を発揮できるような環境を設置するという意味では難しいかなと思うので。それは、私のできたらいいなというところですけど。

名称はどんなんでもいいですけど、先生方のアイデアとか、こういう計画してるんだけどとか、例えば人を何とかということも含めたら、あるような気がしますけど、ないのかな。あるというか、こども支援センターみたいなものとか。こども教育支援か、教育センターか、そういうのがあるといいかな。あるのであれば、もう少し接続教育にも対応できるようなものに強化するということで。

先生方、多忙であることは分かるんですけど、課題としては、人、金、物、あと時間、そういうものをどう捻出するか。

事務局で、せっかくこれで資料をいただいている。

○事務局（内藤） 今、センターというお話が会長からございましたが、平成28年の学校教育審議会のときには、幼稚園が教育的な、センター的な役割を担って、そこも考えて運営していくのがいいのではないかという話が出ておりました。4つの幼児教育センター的役割があります。子どもたちにより質の高い教育と保育を提供するためのセンターだったり、特別支援教育を推進するためのセンター的な役割だったり。そして、幼保小連携の先導的な役割を果たす役割を、また地域における子育て支援の場所としての役割の4つ上がっております。

そこから、今も幼稚園はそういうセンター的な役割を担っているいろんな情報を発信して、いろんな方に来ていただいてつなげていこうとする、意識して取り組んできております。

先ほどありました資料について、カラーの幼児教育と小学校教育の特徴とはという資料ですが、ここに切れ目のない保育と教育をつなげていくところが、文科省でも、ここは切らずにつなげていけることが理想であると言われている資料でございます。

幼児教育はどんなふうに小学校とつなげていったらいいかというところは、もちろん、今も手探りですけど、幼稚園としましては、実際に教育をしている、意欲を育てたりとか、意欲をつなげていくための教育をしているところを保育公開しまして、小学校の先生にも、

私立や公立も就学前の施設の先生方に実際に保育を見ていただいて、一緒に考える場を、つくっているところです。いろんな研究会の形態を模索してるところになります。

先ほども近藤委員がおっしゃられたように幼児教育の現場からも小学校の研究会を知る、そして、私たちのしていることがどこにつながっているかはしっかり学んで、それをこどもに返していくことが大事ではないかと発信していくことが意義なのではないかなと思いますながら、取り組んでいるところであります。

以上です。

○河合会長 具体のものが、どうすればいいか。それが、我々の審議会の課題だろうと思いますけど。分かるようで分からないというか、幼児教育の、どこに聞けばいいんだろう。幼稚園でもいいのかな、幼稚園の設置目的というか、目標というか。そういうものはあるんですか。

○事務局（内藤） 教育目標とかですか。

○河合会長 教育目標。

○事務局（内藤） 芦屋市の全未就学施設の公立ですが、「あ・し・や」頭文字にして、明るい子、しっかり考え合う子、やさしい子、その3つは共通で取り組んでおります。各園でも独自に研究テーマを決めていたりします。

言葉は違っても目指すものは同じ方向で、自分で考える子、自分で行動できる子とか、人とつながる、生きる力の基礎の部分、内面を育てるの部分が大きいと思います。

○河合会長 芦屋市の接続期のカリキュラムって、ちょっと古い資料ですけど。いろんな資料、調べるといって、読ませていただいているんですけど。目的の共通ルールと違う部分を整理しておいたほうがいいのかなと。幼児教育のところ。これは、今の議論を聞かせていただきながら、そもそもどういうふうな、保育もそうですけど、芦屋はさっき言った、その3本の柱があるとする、その3本の柱の中の人としての育ちを大切にすると、一人一人を大切にする。その中身の部分は、多分、幼児教育だけではなくて、小学校も児童期の教育の中にもあるわけで。人間として調和の取れた育成という書き方をしている。教科だけではない。何か方法としては教科書を用いてという書き方をしていますけど。

共通の部分と違う部分を、次までに整理をしていきたいと思います。ここで、また次の議論に入るときには、それを見ていただいて、今まで議論されてきたものを、どういうふうに変形に移していくかということを議論できたらと思います。

この図でいくと、幼児教育と小学校教育の特徴で、ジグソーパズルのようであって、それが重なってる。これをつなぐものは、さっきの私の提案させていただいたつなぐところ、幼稚園と小学校があつたら、2つ重ねた自動的にこんなふうになるのではないかなと思います。特徴はこれで分かるけど。でも、つなぐところってどうす。やっぱりプラットフォームというか。

さっき内藤先生からの説明で、市の幼稚園がセンター的な機能を果たしている、確かに

そういうところも見つけました、ありました。でも、その運営をそれぞれの園に委ねるのは、オーケーなんですか。オーケーというか、素朴な疑問。要するに、啓発な活動も全部含めてということですよ。

○事務局（内藤） 大きな力や、大きな波にはならないと思うのですが、小さな園が活動してるのがじわじわ広がっていくことはあるかもしれないです。

逆に、地域の中にあるので、地域に住んでる方からは、すごく身近で、行きやすく、足が運びやすく、何度も行けるので、そこの園長だったり、職員だったり仲よくなれるんです。身近なところで何かあったら、幼稚園に行って、ちょっと園長先生に話を聞いてもらおうと身近な存在にはなり得てるなと思います。ただ、それが市内全域の、くまなくいろいろなところにその力が及ぶような、大きな波を起こすような施設ではないのは事実だと思っています。

以上です。

○河合会長 私が想像していたのは、例えばこういうふうな建物のどこかにセンターみたいなものがあって、全体をマネジメントして、そこに電話すれば情報が得られるという。今の内藤先生のお話を聞くと、芦屋は地域に根差したこどもの育ちと学びを支えるんだということで、拠点化ではなくて、それらがつながった形の機能的なという。働きとして、それらが動くようなセンターを考えておられるのかな。だから、ほかの1か所で集中的にやっていると、そこが駄目になると全部駄目になるけども、そうじゃなくて、どこかが機能不全になっても、ほかのところが動いて、ちゃんとカバーして、全体としてはこどもたちが快適にというか、こどもたちの育ちがきちっと保証されるような仕組みをつくって、それも可能ですよね。

また、案は1つでなくてもいいと思うので。それも含めたもの、有機的なつながりで市全体のこどもたちを育成していく、育てていくことかなと思いますが。

○野村委員 今、内藤先生の話聞いて、市の幼稚園がセンターとして役割を果たしてるみたいなことをおっしゃって、実際、そうなの？って思いまして。

今のお話だと、結構、地域の人が気軽にに行けるみたいいきこえるんですけど。私、もともと自治会から来てるんですけど、逆で、私が思ってたのは、今、自分のこどももいないのに、不審者とかの問題もあるから、逆に学校とか幼稚園とか中学校とか絶対行っちゃいけないぐらいのイメージなんです。用があるとき以外は。

でも、今の話を聞くと、何か逆で。どうなんですか。

○事務局（内藤） コロナのときは、外部の方は園に入っていただくことはご遠慮いただいておりましたが、地域の方と、七夕祭りの前には折り紙作るような交流会があったり、毎週、園庭開放がありまして、それは保育所さん、こども園さんもされてるんですけど、地域の小さいお子さんが保護者の方と一緒に来られるんです。そして、園庭で遊ぶだけではなくて、在園してるこどもたちと一緒に関わって遊んだりします。そのように何度も足

運んでいただくと、親しくなります。

○野村委員 それは分かります、自分の小さいこどもがいるから。だけど、例えば私とか全然こどもも大きかったり、あと、もっと御高齢の方とか地域の。そういった方たちは別に関係ないということですかね、どうなのでしょう。

○事務局（内藤） オープンスクールとかには、地域の方にいらしてくださいとご案内することもあります。

○野村委員 いわゆる市民に対してオープンだという捉え方でいいってことですか。分かりました。

○近藤委員 ただ普段、毎日、いつでも自由にどうぞというわけではなく。

○野村委員 そうですね。何か決められたときとか、何か行事があるときとか、お声掛けがあったときということですね。

○近藤委員 各園の地域ごとに、地域と何らかの交流があったり、それは各園の特色があっていいことだとは思いますが。幼児教育と小学校教育のつながりを考えるときに、芦屋はどうかと聞かれたときに、芦屋はこうですと言えるものがあるといいなと思っています。

もちろん、共通の教育理念や教育目標は持ってるんですけど、接続期カリキュラムに関しては、まだまだつくられていないもので。今度、これを考えていこうといったときに、うちで考えてみました、こっちで考えてみましたってなると、1本通ってないものがあるのではないかなとは思いますが。

それを、例えば今、西山幼稚園さんや山手夢保育園さん、芦屋川ナーサリーさん、山手ナーサリーさんがその地域で、山手小学校地区のこどもたちのための接続を考えてくださったりもしてるんです。ただ、山手地区のカリキュラムと潮見地区のカリキュラムが、（文言の差とかではなくて）違っていると、それって未来ずっとつながっていくときに、学校ごとにまた変わるのかみたいなこともあるのでは？芦屋市内の教育とはこれ。これで行っていますみたいなものがあると、こちらを基に自分たちがカリキュラムを立てることができるので。

ただそうなると、市内の小学校の先生方とみんなで集まるとなると、なかなかすぐに声を掛けて、代表が集まりましょうということが、まだ難しいのかなと。学校は学校での年間のスケジュールや教育課程もあるので。一本化、何かつくりましょうということが、はい、じゃあ、やりましょうって、なかなかまだできてない。もしかして、何年もかかるかもしれないけど。

○河合会長 接続の形としては、そうかもしれないですが。それは、本当に教育課程そのものを変えていく部分になるので。それぞれのところがやっていってはいけない、いけないわけではないけど、それぞれの独自性を持ちながら、全体としての統一性を維持していく、その仕組みを考えないといけないので。

○近藤委員　そうですね。それぞれの特色を出すための、まずは基の芦屋市としてというところが。

○河合会長　だから、それは少し時間がかかるかもしれないです。

この審議会に託されているのは、今ある現在の幼稚園をどういうふうと考えていくか、方向づけていくか。その中で、1つの可能性としては、幼小を接続していくことで、幼稚園を残したいというか、残していこうという考え方で。人数が減ってきているところについては、どういうふうにするかも含めて、提案をしていくことになると思うんですけど。

今日、御議論いただいたのは、その接続の仕方。必要だから、幼稚園教育に意味があるんだと思う。人数もさることながら、人間の生涯の発達を考えたときに、教育を考える。そのときに、幼児教育はその根っこであって、その根っこの部分をしっかりと張ることができるような幼児教育。その可能性は、今ある芦屋の幼稚園の中で、うまくそれらを相互に連携して統合するなり、何らかの形で残していく。そこが、市立も私立も含めて、こどもたちという視点で考えたときに大事なんだろう、そういうことなのかなと。

今日、いただいたのは非常に具体的な、具体的というか、私は具体的なものを提案という形で、一つ一つまとめさせていただいているんですけど。縦軸と横軸、そういう表現がいいか分からないですけど、縦糸と横糸で年齢というか学年というか、それが縦糸で、地域が横糸。その地域に根差したものが、学年が上がっていくと、それぞれの学校、それぞれの中学校とかになってくると、それぞれの独自性になっていくわけだけど。その時間というか、学年と地域、そういう縦糸と横糸の中で、ちょっと整理ができないかな。一番大事な、一番最初の出発点を、今日、御議論いただいたのかなと。

要するに、最後の内藤先生のお話ではないけど、全域、全ての地域の中に一人一人のこどもがいて、その地域に根差して、こどもたちが育っていく。それが、学年が上がっていくと、それこそ、別に芦屋でないところの学校に行く子もいるわけで。それこそ個性のであって、日本にとどまる必要もないわけで。

だから、学年というか時間軸が上がっていくと多様になってきて、その根底には芦屋があって、そこで心が育てられている。そのためのあり方って、どうすればいいのかということになるのかなと思います。

ちょっと時間が、十分議論できないまま来ました。市立幼稚園を、今、行ってきた活動とか地域に根差していることを生かしながら、次の次世代の幼児教育、幼稚園のあり方を検討していきたいなと思います。

特色ある教育が、次回も少し考えていただくとして、やっぱり課題はあります。十分に議論できていないので、次回は少し、こういうこと問題があるんだ、先生の負担についてはここで聞きましたけど、それ以外です。プログラムつくるのでも、そう簡単ではない。1年生のこどもが何時間もかけて準備してきて、最後の姿がここでやるんだと言われたわけですけど、実際にそれを動かしていく上での問題を含めて。

教育委員会は、人の問題とか、小学校の指導要領で時数が、学校の独自科目を設定していくことと、あとクラスサイズが小さくなる。そのことの意味は、直ちに先生たちの補充を考えないといけない、そういう事態に立ち入るので。そこも含めて、こちら側としてはこんなことができたらいいなという提案をするのが、我々のメンバーの仕事なので。してよねというものを出そうと、もちろん思うわけですけど。

私たちが考えている課題以外で、また、教育委員会としてもない袖は振れん、いくら市長さんがこうだと言っても、ない袖は振れないかもしれないし。その辺については、また、次回にできたらなと思います。

成田先生、いつもの。

○成田副会長 まとめからはちょっとずれるかもしれないのですが、本日いただいた資料の中に、幼児教育センター設置都道府県で、兵庫県は白いまま、未設置になっています。今のお話では、芦屋市においては、各幼稚園がそれぞれで地域のセンター的な役割を担っています、という考えであると承ったかと思います。でも別途新たにそうした各拠点を結ぶ・繋ぐセンターを作っても良いんじゃないかなと思ったりするわけです。これ、賛否あると思います。

近藤先生がおっしゃったような筋の通った、芦屋の中で、明るく、しっかり考え合い、優しい子どもを育成するためには、それぞれの施設で個性をもち、みんな違ってみんないい、のではあるのですが、芦屋としても統一感を持って連携する組織というのは必要かもしれないなと思います。目指すべきもの、お題目としての芦屋のこどもはあるとしても、それを実現するためのステップとして、連携させるような組織であったり、仕組みであったりを考える、構築することも大事ではないかなと思います。もちろん、個々の組織・施設等が頑張るのは良いことですし、これからもやってもらった方がいいと思いますけど。

ただ、どうなんでしょう。今、もちろん答えは必要ないので、次回に向けて、そうした組織・施設等の可能性などについてご検討をいただいたら、われわれもそれを受けて、こうやったら、みんなのそれ良いねが実現する方向にいくかもしれないなんて、まとめにはなっていないのですけれども、ちょっと思ったりいたしました。

○河合会長 私なりに解釈すると、ないものはつくったらええやんかと。

ちょっとオーバーしてますけど、時間が。次回は11月にあって、それほど期間は空いてませんが、それまでにこれを整理して、論点を挙げて、一つは幼小の接続のあり方、必要であれば新しいカリキュラムを含めたものを考えて。あと、それを実行できるような環境はどうか。それは、事務局で、ここの幼稚園は、それを担っていただくのはとてもしんどいだろう、そうではなくて、むしろ仮想的な形で連携を取っていく。そういうことも含めて、ちょっと提案をいただく。議題整理はまたさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

10分ほどオーバーいたしました。田附先生、何か。

○田附委員 最後に1分だけいただけますか。

今のお話が出て、私、全部の幼稚園に出向かせていただいたわけではないですけど、このお話も聞いて。潮見幼稚園は小学校が近いからすごい連携をされて、西山はそれほど小学校、中学校近くないけど、その分、地域のほかの幼稚園とか保育所と連携されて。小槌幼稚園は隣に打出教育文化センターがあるのでという、それぞれに特徴があるので、その特徴を生かして、それが、今、お話が出た個性やと思うんです。

それをまとめるという意味で、例えば新しく箱物なんか造らなくて、打出教育文化センターを一つの拠点にして、例えば小槌幼稚園が、実験と言ったら失礼ですけど、こどもたちに。モデルになるような、教育大附属の小学校みたいな形で、幼児教育と小学校との連携を取り組んでいくみたいな形で、ほかの幼稚園もそれぞれの地域の特性に応じたことをやりながら、全体をまとめていくことができるのかなと感じました。

もう一個だけ、東川の取組は、昔「幼児センター」と書いてたんですけど、令和7年から認定こども園になってますので、私の資料の読み取り不足でした。

ただ、認定こども園も入園資格がありますよね。1回目か2回目の会議で、長い時間預かってもらえないから、幼稚園にはちょっとというお話があったりしたので、そういうのを全部、今の幼稚園は教室が空き教室がありますので、新しいこども園をつくるんじゃなくて、既存の幼稚園の施設を使って、そういうふうにゼロ歳児から5歳児まで十分に芦屋が教育できるような、入園資格もできるだけ取り払って。そういうふうにしたらいのかなと感じました。

○河合会長 事務局のほうというか、教育委員会のほうになかなか宿題が来ました。

以上で終わります。

○事務局（長岡） お時間超過しておりますけど、木下委員から事前に御意見をいただいておりますので、御披露だけさせていただきまして、終了とさせていただきたいと思います。

○事務局（長岡） ここで、基本的には御披露させていただく予定やったんですけど。

○河合会長 そしたら、田附先生はリモートで入れなくなりましたので。田附先生だけ後でということをお願いします。

○事務局（長岡） はい。御披露させていただいてよろしいですか。

就学前施設、とりわけ小学校との連携は大切であると考えています。幼稚園と小学校は所管が同じであったこともあり、連携のノウハウは保育所やこども園よりかは少し強いと考えています。現に、潮見幼稚園は潮見小学校と同じ敷地内で近い上に、教職員同士も交流しやすい環境、こどもたちの短い休み時間でも交流できる強みがあります。

宮川幼稚園も岩園幼稚園と同じ強みを持っています。小学校と隣接している幼稚園の強みの一つだと思います。小槌幼稚園や西山幼稚園も校区内の小学校とは連携していますが、気軽に足を運んで行けるところまでは至っておりません。

様々なことを考えた上で、どう整理していくかという点においては非常に難しいです。どこの就学前施設も、目の前のこどもたちのために状況に応じて、様々な学びを一生懸命に推進してきているし、不必要な施設は一つもないです。どうしてもこどもの数の推移や財政的なことなど総合的に考え、今後のことを考えていくのであれば公立小学校との連携において地道に交流、推進をしてきた公立幼稚園の存在は大きいので、そこは大事なポイントであると思います。

特に、連携しやすい宮川、岩園、潮見は、就学前施設と小学校の円滑な接続モデル園とした役割が十分果たせるので、たとえ人数が少なくてもその良さは、その園の特徴として残しながら、芦屋の教育の形として進めていくのもありではないかと私は思います。という御意見でございます。

○河合会長 田附先生が言われたことと少しかぶること、近いところが。

○事務局（長岡） 田附先生には、また内容をメールでお送りさせていただきますので。

○河合会長 ありがとうございます。

○事務局（長岡） 最後の締めだけをさせていただきたいと思います。

本当に、長時間にわたりまして、ありがとうございました。次回の第4回は11月10日月曜日の13時半から15時という予定ですが、御審議の内容によっては少し延長させていただく可能性もございますので、事前に御了承ください。

また、第5回目以降につきましては、別途日程調整をさせていただきます。本当に今日は長時間にわたりまして、ありがとうございました。次回もよろしくお願いいたします。